

英語学習者における句動詞定型表現の 効果的な学習方法に関する考察

村木 恭子

1. はじめに

英語学習を進めていく中で、学習者の最も大きな関心は語彙力の強化であり、大学の講義の中でも語彙に特化した学習を希望する声も多くある。中川（2012）は、語彙指導において、学習者は辞書に載っている説明のみでは理解できないこと、またその語彙を習得するための効果的な方法を求めていると指摘している。1語ずつの語彙の習得も大切なことではあるが、自分の思いを表現したり相手の気持ちをくみ取る力、最終的には「読む・書く・聞く・話す」の四技能を効率的に高めるためには、単語レベルではなく、句のレベルでの習得をより強化していく必要があるのではないかと教える立場としても、また1人の学習者としても感じる。

大津（2016）は、言いたいことを表すにはまずは動詞を選ぶことが必要になり、そこからその動詞にはどのような部品を必要とするか、どの位置に置くかということを考え、単語のまとまりを作っていくと述べている。國分（2007）は、日本人英語学習者は、基本動詞を英語教育の初期段階に学んでいるが、誤用したり、十分に使いこなせていない傾向が見られていること、また語彙学習において学習者が1つ1つの語に注意を向けるのではなく、1つの単位として認識することの必要性を述べている。

本稿では、学習者にとってより効果的な句動詞定型表現に関する学習法及び教授法を検討するためにこれまでの先行研究をまとめ、今後の展望を述べたい。

2. 句動詞とは

句動詞 (phrasal verb) とは、動詞 (lexical verb) と不変化詞 (particle) が共起することで、本来の動詞とは異なる意味を有する複合動詞である (二枝, 2006)。嶋田 (1985) では、不変化詞と前置詞の区別については、それ自体が目的語を持つか否か、また不変化詞と副詞の区別として位置の変化や状態の変化をあらわす語であるか否かと述べている。

不変化詞に関しては、学校文法では、前置詞や副詞と記している場合が多く、動詞+前置詞、動詞+副詞で基本動詞の意味を広げ、群動詞と呼んでいる場合もある。日本語文法において、前置詞に相当するものはなく「助詞」がその役割を果たし、便宜上「後置詞」と呼ばれることもある。母語である日本語文法には「前置詞」という概念が無いこと、また句動詞が使用する場面によって意味が変化する多義性を持っていることが、日本人英語学習者の句動詞習得に困難をもたらしている一要因と考えられる。ヴォイニコヴァ (2017) は、日本語学習者による複合動詞の使

用について英語の句動詞研究を応用して行っているが、その中で英語の句動詞と日本語の複合動詞は、いずれも2つの要素が組み合わさって1つの新しい単位を作ると述べている。このことから、日本人英語学習者にとって、英語の句動詞はけして馴染みにくいとは言えないのではないかという考え方もできる。

田川・由井蘭 (2016) は、“put off” であれば、「置く」と「離れる」に訳することができるが、訳を合わせても“put off” 本来の意味である「延期する」という推論ができないため、構成する単語を日本語に直訳する方略は効果がない場合が多いと指摘している。その上で、訳語は丸暗記して学習されるが、丸暗記して覚えた単語は忘れやすいとも指摘している。一方では、二枝 (2006) は、句動詞は生産性が高く、相当する一語動詞より口語に多く用いられるという利点もある。

中川 (2012) は、句動詞は様々な意味を持つので学習者が意味の推測をするのに困難をきたすが、不変化詞自体が多義的であること、また外国語としての言語習得の中で多義語を記憶に留めることは難しいと述べている。さらに、ネイティブスピーカーにとって、句動詞のニュアンスの違いは、無意識に獲得された言語感覚によるものであるため、例えば辞書で“run into” “come across” “run across” が『偶然会う』という意味が出てくるその差異が生じる有縁性について言及できる人は少ないと指摘している。そのことから、学習者に対して、イラストを用いて丁寧に基本イメージから拡張語義まで呈示することで、感覚を掴めるように働きかけることの提案を行っている。

3. 教材開発及び学習効果の分野における先行研究

田川・由井蘭 (2015, 2016) では、文脈に依存しない意味である単語の「コア理論」を用い、イラストやアニメーションなどの視覚情報及び、触ることや体を動かすことで、句動詞を学習するタブレット端末教材の提案を行っている。まず、句動詞の前の単語レベルで、コア・イメージを呈示し、その後組み合わさった句動詞のコア・イメージを学習する。その後、実際に“hold back” ではタブレット上で、ボールを動かす（隠す）動作であったり、“put up” では、端末を持ち上げる体験をすることによって語彙の意味を学習することを提案している。最終的には、句動詞が含まれる英文を複数呈示し、日本語訳を推測させる活動を行い、学習が終了するというシステムである。

佐野 (2006) では、British National Corpus のコーパスを用いた句動詞用例集の開発における工程について述べており、その中で句動詞の形のバリエーションについても挙げている。主語と動詞の関係性から動詞を分類し、動詞が定形 (finite form) で使われることが多いか、もしくは非定形 (non-finite form) と呼ばれる過去分詞形、-ing 形、不定詞を取ることが多いか、用例を細かく分類し、抽出することで、語法観察の視野がより広がる、また主語と句動詞の関係分析が可能になると述べている。

國分 (2007) は、10週間にわたり、基本動詞とその formulaic sequence (定形表現) の学習において、Lewis (1993) のレキシカル・アプローチが推奨する「観察－仮定－検証」を応用した

「観察－仮定－検証－確認」のステップを踏む分析的で明示的な語彙学習活動を行い、従来の機械的な暗記法を用いたクラスとの比較で学習効果を調査した。語彙の学習活動では、単語に対する知識を深めさせるように英英辞典を使用するなどして中核の意味概念を与えること、次に semantic mapping を用いて定形表現を含む文を分析しながら、基本動詞の意味概念を検索させた。最後に、ストーリーのある連続した絵を使用しながら、基本動詞に関する意味概念の検証を口頭で行い、最終的には絵を描きながら意味概念のイメージ化を行うという順序であった。事前事後テストの結果、上位群の学習者では、分析的な学習法の方が、従来の暗記法を用いたクラスよりも学習効果が見られ、下位群の学習者では、従来の暗記法を用いたクラスの方が、学習効果が見られた。また、分析的な学習活動を受けた学生からは、語彙の学習が暗記ではなく、基本となるイメージを掴むことが大切であるということ、そこから広がって色々な意味になるということ、掴めたなどの意見は、とても興味深い。

中村 (2013) は、三語句動詞 (自動詞+副詞+前置詞、他動詞+副詞+前置詞) を対象として、学習の際に困難を要する部分や、意味の透明性、学習者のレベル及び海外在住経験の有無が習得率に影響を及ぼすか調査した。動詞、副詞、前置詞の選択の中では副詞の選択が、動詞や前置詞に比べて容易に感じる傾向にあること、意味の透明性については、日本語訳と句動詞との対応度 (連想度) が習得に大きな影響を与えていると述べている。さらに学習者のレベルについては、上位者・中位者の習得率に有意な差は見られず、必ずしも上位者が句動詞を十分に習得しているとは言えないこと、また海外在住経験の有無との比較においても、習得率に影響を及ぼすとは言えないと述べている。

4. コーパスを用いた先行研究

石井 (2018) は、英語母語話者・英語学習者の話し言葉コーパス (NICT JLE コーパス及び The ICNAL spoken monologue コーパス) と教科書コーパスの比較から、学習者の句動詞の使用について調査した中で、学習者が過剰に使用する句動詞として、“go to” “live in” “come to” “listen to” を挙げ、英語学習の初期段階から繰り返し練習をするものである、と指摘している。また、母語話者が高頻度で使用するが、学習者の使用頻度が低く、さらに教科書での使用頻度も低い句動詞として “depend on” “pay for” “end up” を挙げ、教材等での扱いが手薄である可能性について指摘している。

飯尾 (2013) は、複数のコーパスを用いて日本人学習者の句動詞の使用実態を調査した。日本人の中高生による自由作文コーパス (JEFLL) を用いた分析からは、“breakfast” のトピックでは “get up” “wake up” のように題材の影響が見られること、また学年が上がるほど、句動詞の種類や数が増えて行く傾向が見られること、そして “carry out” のように中学生では全く使用が見られない句動詞があることを示した。日本人学術論文コーパス (PERC) からは、理系分野のコーパスではあるが、“carry out” が最も高頻度で使用されており、母語話者の大学生エッセイコーパスである LOCNESS の頻度とほぼ同等であると示している。

谷 他 (2013) は、1980～90年代のハリウッド映画の字幕シナリオをコーパスとして使用し分

析した結果、“get” “go” “come” で構成される句動詞が、上位20件中16件をしめていることを示した。また、映画というコーパスの特性の影響も示唆しながら、談話標識の一種である句動詞“come on”の頻度が最も高かったことも示した。しかし、Longman Grammar of Spoken and Written English (1999) の会話ジャンルでも“come on”が“go on”と合わせて最頻出であることも取り上げ、注目すべき事柄である、と指摘している。さらに、谷 他 (2013) では、句動詞と同義と教授される1語動詞が本当に同義であるのか? という点から、“call off”と“cancel”を例に取り上げ、BNC コーパスを用いて分析している。使用頻度の面では、話し言葉で“cancel”が“call off”の7倍の使用が見られた。“cancel”に対しては、意志性が弱く、やむを得ず中止するという場合の使用が多く見られるが、“call off”に対しては、自ら強い意志で物事を取りやめる場合の使用が多く見られると指摘している。その他、コーパスの用例から時制や態、主語、目的語として用いられる名詞の種類など、多方面から分析している点が興味深い。

5. 学習教材

投野 (2004) は、BNC コーパスの話し言葉セクションをもとに、よく使われる語彙100語をピックアップし、その語彙がどの語と結びついてよく使用されるかコロケーション情報を調査し、学習教材として活用している。その中で、“work” “turn” “move” “give” “put” “take” “bring” “come” など動詞と、前置詞及び副詞との結びつきをランキング形式で呈示している。また、解説や、例文で学習を深めることができる。コーパスという言葉は、学習者には定着はしづらい可能性があるが、理論に基づき語と語の結びつきを効率よく学ぶことが可能であることを示している。

バートン (2013) は、イギリスで自閉症スペクトラムの人と周りで支援する人達向けの、英語表現を絵 (イメージ) と、実際の意味の解説を合わせた図鑑である。イディオムや日常表現など様々な表現を扱っているが、句動詞の1つである“hang on”に対するイメージ絵 (人がぶら下がっている状態) と意味“wait”が書かれていることは、文字から捉えられるイメージと、実際の意味へのギャップを埋める手助けになる。

ソレシティ・大橋 (2017) は、英語が話せる方法の1つとして、まず前置詞を使う感覚を掴み、その後句動詞をイメージで学習することで、前置詞の定着も高まると述べている。またその一環で、句動詞のみで覚えたり使おうとするのではなく、文脈の中でイメージを掴むようにすることで、たとえ前置詞を多少間違えたとしても、相手に通じると述べている。

6. まとめ

本稿では、日本人英語学習者をとりまく句動詞の状況について、先行研究から考察を試みた。学習効果に着目した研究からは、従来の機械的な語彙学習ではなく、語彙に対してより深く着目できるようなアプローチを用いることで、成績面での向上だけでなく、学習者の意識も向上した。ただし、上級者・下級者によって効果的な学習法には差が見られること、また上級者であっ

ても十分な句動詞の知識を有していない場合もあるので、学習者のレベルに合った方法を選択する必要があることが考えられる。

コーパスを用いた研究からは、日本人英語学習者と母語話者の句動詞の使用には大きな差が見られ、過剰使用・過少使用さらに題材による影響が見られたことから、学習状況や教材の影響が示唆された点は興味深い。さらに、句動詞と同義であると教授しがちである一語動詞については、細かい側面を見ると必ずしも一致はしていないため、注意深く、丁寧に使用していく必要がある。

句動詞に着目した教材も複数見られ、母語話者コーパスでの出現頻度を生かした教材や、イメージで句動詞を捉えさせようとする試みは大いに参考になった。訳語を暗記で覚えようとすることは、定着が難しいと言われていたことから、イメージを効果的に使用する方法を積極的に取り入れていきたいと考える。

今後の計画として、学習状況や教材の影響が考えられることから、保育英語や日常英会話、また TOEIC などの資格試験など、分野ごとに必要な句動詞をまとめ、必要に応じてイメージで捉えられるような教材作りを試み、学習者の反応の調査及び、より定着を望める語彙指導の方法についてさらに検討していきたいと考えている。

参考文献

- 飯尾豊 (2013) 「コーパスを用いた日本人学習者の句動詞の使用に関する研究」熊本大学社会文化研究, 11, 35-53.
- 石井康毅 (2018) 「話し言葉コーパスと検定教科書に基づく日本人英語学習者の句動詞使用実態の分析」 *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 3, 101-119.
- 大津由紀雄 (2016) 「第 1 章 英語を学ぶということ」大津由紀雄・嶋田珠巳編『英語の学び方』ひつじ書房.
- 國分有穂 (2007) 「自主的語彙学習者育成のための語彙指導—lexical approach の指導法の検証—」 *STEP BULLETIN*, vol. 19, 147-157.
- 佐野洋 (2006) 「BNC を利用した教育用英語句動詞用例集」情報処理学会研究報告コンピュータと教育 (CE) 2006-CE-084, 1-6. 一般社団法人情報処理学会.
- 嶋田裕司 (1985) 『新英文法選書 第 5 巻句動詞』大修館書店.
- ソレシティ・大橋弘祐 (2017) 『難しいことはわかりませんが、英語が話せる方法を教えてください！』文響社.
- 田川友瑛・由井蘭隆也 (2015) 「英語句動詞の語感学習を支援するタブレット端末教材の提案」情報処理学会第 77 年全国大会講演論文集, 4, 179-180.
- 田川友瑛・由井蘭隆也 (2016) 「英語句動詞の語感学習を支援するタブレット端末教材の開発と評価」情報処理学会研究報告, 1-7.
- 谷明信・堀池保昭・杉本直樹・富田かおる (2002) 「コーパスによる英語句動詞研究—応用言語学的観点から—」実技教育研究, 16, 31-37. 兵庫教育大学.
- 玉置全人・室田芳丘 (2007) 『スピード検索文法・語法ナビ English Tool Box』アルク.
- 投野由紀夫 (2004) 『NHK100語でスタート! 英会話 コーパス練習帳』NHK 出版.
- 中川右也 (2012) 「句動詞指導への示唆—認知言語学と英語教育の接点を求めて—」米子工業高等専門学校研究報告, 47, 6.

- 中村俊佑 (2013) 「第二言語習得における句動詞—三語句動詞の学習において日本人学習者が直面する問題点—」 *KEIO SFC journal*, vol. 13, No. 1, 87-98. 慶應義塾大学湘南藤沢学会.
- 二枝美津子 (2006) 「英語句動詞の認知言語学的分析」『京都教育大学紀要』 No. 109, 31-43.
- Lewis, M. (1993) *The lexical approach: The state of ELT and a way of forward*. Hove: Language Teaching Publications.
- ヴォイニコヴァ・マリヤナ (2017) 「日本語学習者による複合動詞の使用についての実証研究：母語話者・学習者コーパスによる調査をもとに」 *日本語・日本文化研究*, 27, 89-96.
- マイケル・バートン (2013) 『生きた英語表現を楽しむ学ぶ絵辞典』 東京書籍.

(受理日 2019年1月7日)